

〈翻訳〉

ユンカー・フォン・ランゲック著
『瑞穂草，第二部，雑学の部』より

第1章 日本の文学 言語の構造ならびに日本人の文学と詩歌(1)

熊谷知実

はじめに

フェルディナント・アーダルベルト・ユンカー・フォン・ランゲック (Ferdinand Adalbert Junker von Langeegg, 1828-1901頃)は、法律家の息子としてウィーンに生まれ育ち、法学、哲学、並びに医学をウィーン大学で修めた。ロンドンの病院で勤務していた1867年には小型吸入麻酔器を発明。その吸入器は「ユンカー」と呼ばれて、第二次大戦まで世界各地で外科手術に利用されている。京都初の西洋式病院として「京都療病院(現在の京都府立医科大学)」が設立された1872年に、初代外国人教授として京都府に招聘されたのが、このユンカー医師であった。当時粟田口青蓮院内にあった仮療病院まで、ユンカーは人力車を使って通勤し、講義や診療を行っていたという。三年半の京都滞在中、ユンカーは日本と日本文化に傾倒して多くの文学作品を蒐集、帰国後はそれらをまとめて、『瑞穂草』(1880年)と『扶桑茶話』(1884年)として出版した。後者の『扶桑茶話』は、日本に伝わる民話や伝承を紹介した小作品集で、京都府立医大に縁ある医師奥沢康正氏の手による全訳がすでに公開されている。本稿において本邦初の翻訳を試みるのが、前者の『瑞穂草 (Mizuhogusa Segenbringende Reisaehren, Nationalroman und Schilderungen aus Japan)』である。ユンカーが帰国後最初に手掛けた三巻からなる日本文学総論で、日本の国生み神話や日本武尊の伝説、『源平記』といった古典的な文学作品が多岐にわたって紹介されて

いる。百三十年以上前の京都に赴任した「外国人医師」が、これらの古典文学を通じて当時の日本をどのように見ていたのか、現代人の視点で考察することは非常に意義深い。この大作を一度に紹介することは困難だが、少しずつ部分訳を進めていきたい。

なお Junker という名字は、母国語のドイツ語では「ユンカー」と発音されるが、彼が来日した当時はオランダ語の発音で「ヨンケル先生」と呼ばれていた。後の研究でも、彼の名は常にオランダ語発音で紹介されているが、本稿では便宜上、ドイツ語の発音で通している点をお許し頂きたい。第一巻の『忠臣蔵』を日本語に訳す仕事は省略して、本稿では第二巻の「日本文学」の章から順を追って紹介していくことにする。⁽¹⁾

1. 上代大和言葉

日本語の合成語と文法構造について、説明と注釈を多少追加することで、この第二部および本書全体への読者の理解がいつそう深まるのではないだろうか。ここで簡単に説明しておくことにしよう。三世紀末頃に中国語が伝来するまで話されていた、外来語が混合していない日本語のことを、上代〈大和〉言葉(*)という。この上代大和言葉は、完全に独立した言語である。数多くの中国語の語彙を受け入れたあとも、独自の発展を遂げていった。外来語の要素を受け入れたうえで、それを日本語固有の文法構造に従属させたのである。現在の日本語の語彙は、日本固有の大和言葉と中国語から成りたっている。中国語の語彙は、日本語の発音と構造に従属させられたのだ。

(*) 〈大和〉⁽²⁾とは日本国の古い呼称のこと。日本と中国の図説大百科事典にあたる〈和漢三才図会〉の173巻の説明が正確である。⁽³⁾〈和漢三才図会〉は、天、地、人の三才を日本語と中国語で描写している書だが、〈和漢〉とは日本と中国のこと、〈三才〉とは古い仏教用語で、天、地、人を表わす三つの根源的な力のこと、〈図会〉とは素描や挿絵のことをいう。yama という言葉の由来は

山, それに後ろを意味する ato がついて, 〈大和〉の意味は「山の後ろの国」であるという説は, 多くの人に疑問視されている。〈大和〉は, 天皇が支配していた五つの行政区である〈五畿内〉を指している。さらに〈大和〉は, 日本国民のあらゆる特性を表している。例えば〈大和言葉〉といえば, 古代の日本語のことで, 〈大和魂〉とは, 日本人の国民性のこと, すなわち勇気があって恐れを知らず, 死を軽んじる態度を表わしている。〈魂(tamashihi, tamashii)〉とは, 霊魂や精神の意味である。

1-1. 中国語と漢字の日本への導入: 〈王仁〉

中国の文字と文学が最初に日本に伝えられたのは, 西暦284年(皇紀944年), 第十五代〈帝(Mikado)〉の〈応神天皇〉が在位していた西暦270-310年(皇紀930-970年)のことである。(*)中国より〈王仁(Wang=Tsing)〉という学者が渡来, 日本人はこの学者のことを Wani と呼んでいた。日本の朝貢国のひとつである朝鮮半島の〈百濟〉の王子の家庭教師をしていた〈王仁〉は, 西暦284年(皇紀944年), 日本に中国語で書かれた古典作品を二点伝えた。〈孔子〉の論集である〈論語〉(**)と, 〈孔子〉の教えの手引書である〈千字門〉(***)である。この〈王仁〉が, のちに第十六代〈帝〉の〈仁徳天皇〉(西暦311-399年, 皇紀971-1059年)となる皇太子の教育係に任命されると, 皇太子は中国文学にことのほか没頭し, 延臣たちも皇太子に倣った。これが中国の学問導入の起源であり, 日本語と日本人の精神形成の発展に決定的な影響を与えたのである。(*****)

しかし中国語と漢字が一般にまで普及し, 日本に確固たる根を下ろしたのは, 六世紀になって仏教が伝来したあとのことであった。(*****)この頃から教養人は中国語で授業を受けるようになり, 中国語で倫理哲学や学術書を読み, 文書や書簡を書くことが可能になっていったのだ。

しかし日本人が発音することで, 中国語は本質的な変化を遂げる。やがて大陸の中国人には理解できない新たな方言が誕生した。その一方で, 漢字や中国文学の知識を得ていた日本人は, 中国とは精神的につながったままの状態にあった。

(*)日本の年号は、紀元前660年の初代〈帝〉の〈神武天皇〉の統治時代から始まっている。この〈神武天皇〉以降、全ての天皇が途切れることなく一つの系譜に繋がっているのだ。本書では、日本の年号の前に常に西暦年を書いて、そのあとに日本の年号を()で添えることにする。例えば、〈神武天皇〉の統治時代は、紀元前660-588年(皇紀元-76年)というように⁽⁴⁾。

(**)〈論語〉の〈論〉とは議論や論証のことで、〈語〉とは収集したり要約したりすること。両者ともに、古い中国語に由来している。⁽⁵⁾

(***)〈千字門〉の〈千字〉とは古い中国語で教師を意味し、〈門〉とは扉や入口を表す。⁽⁶⁾

(****)日本文化史の発展における朝鮮半島の影響は極めて重要である。朝鮮半島から直接、あるいは朝鮮半島を経由して中国から、多くの手工業や芸術、学問や哲学、のちには〈仏陀〉の教えがこの島国へと移植された。〈王仁〉によって中国語が伝えられたのと同時に、あるときは新しい産業分野が、またあるときは朝鮮半島ですでに高い発展段階にあった改良技術が、日本に来て突破口を見出した。馬や武器や鏡といった朝貢品が、〈百済〉王から〈帝〉へ献上される際には、お針子も同行してその熟練技術を日本に伝えた。この使者団の代表人物に、評判の高い〈阿直岐〉という名の学者がいた。〈応神天皇〉はこの〈阿直岐〉より、〈王仁〉が〈百済〉王の宮廷に滞在していることを知り、王仁を日本へ呼び寄せたと言われている。この中国人学者に同行して、金細工師、織物師、〈酒〉醸造師が、新たな故郷への移住を果たしたのだ。

(*****)仏教伝来の時期に関して、日本人は仏陀の肖像が初めて朝鮮から持ち込まれた第二十六代〈帝〉の〈継体天皇〉(西暦507-531年、皇紀1167-1191年)の治世だと考えている。しかしこの時代の言語構成への何らかの影響を確認することができない。仏教の伝道師たちが新しい教えを口頭で、それもおそらく大衆だけが理解できる大和方言で伝導しようとしたとき、日本固有の古い神々に、〈神(kami, shin)〉に背く気にはなれなかったのだろう。言語学的に遡ることができる最古の時代として、慎重にはあるが、仏教の経典が最初に導入された時代を挙げておきたい。〈仏陀〉の像や天蓋、天幕、その他の寺院内で使用される道具といっしょに、〈百済〉王が第二十九代〈帝〉の〈欽明天皇〉(西暦540-571年、皇紀1200-1231年)へ書簡を送ってきた。その書簡の中で、〈百済〉王は新しい宗教のすばらしさを絶賛すると同時に、日本にも導入してくれるよう〈帝〉に懇願した。仏教の普及は後の時代にまで持ちこされたが、それにつ

いては該当箇所ですくしく述べることにしよう。

1-2. 日本語と中国語の融合

中国語と日本語の発音が独自の融合を果たすのと同時に、日本語の文法規則に中国語が服従するという現象が起った。類似した例で言えば、ノルマンディー公ウイリアムが英国を征服することによって、英語とフランス語の言語が互いに変化を遂げ、英語がフランス語の語彙と文法を受容して、アングロサクソン方言になっていったときのように。これと同じように、中国語も日本の知識人の言語となったのだ。だから西洋の学問が導入されたときでさえ、書き言葉の漢字が完全に排除されることはなかったのだろう。中国語は発音的にも文法的にも、日本語の性格に適した方法で導入されていたのである。

1-3. 漢字の二重解釈：〈声(kohe)〉と〈読み(yomi)〉

日本人が日本語を漢字で書き始めたとき、言葉の音を文字で分けて発音するのではなく、漢字で音節にまとめて音を表現することで、音声システムを発展させていった。中国語起源の言葉は多かれ少なかれ合成語からできているが、独自の表意的価値と表音的価値があり、独自の意味や発音が備わっている。例えば、数字の1000に相当する漢字は「千」で、中国人には tsi-en として、日本人には sen として発音される。上代大和言葉の数え方では、「千」は shi(発音は tsi)である。

どの漢字にも、日本語アクセントに変化した単音節の発音がある。その音を日本人は〈声(Kohe)〉、あるいは中国語の〈韻(Yin)〉を用いて、〈音(On)〉と発音して表現している。それに対して、漢字の意味を表す言葉は、読み方や解釈にあたる〈読み〉という表現をしている(*)。あるいは日本人は〈訓(Kun)〉ないし〈読(Toku)〉とも呼んでいる。上述の「千」の文字でいえば、日本人が Sen と発音しようが Shi と翻訳しようが、これは表意文字であり、もしくは Sen と Shi という音の音声記号にすぎない。

この関係性には多少混乱させられるが、私たち西洋人が使用しているアラビア数字と単純に比較することで、解釈できるのではないだろうか。1, 2, 3といった数字に、漢字があると思ってほしい。その漢字の形は、どの西洋人が見ても、同じ数字の価値を表している。それがこの記号の〈読み〉とっていいだろう。ドイツ人がアインス、ツヴァイ、ドライ、イギリス人がワン、トゥー、スリー、フランス人がアン、ドゥ、トロワと発音するように、どの国民も数字を独自に発音する。この多様な発音こそが、〈声〉とっていいだろう。

したがって、漢字には二種の発音が存在する。日本語アクセントに変化した中国語の発音〈声〉、すなわち抑揚で表現するもの、もうひとつは日本語の概念を表わす言葉〈読み〉、すなわち解釈や読み方によるもの。例として、三つの根源的な力を表わす〈三才(Sansai)〉の呼称に該当する漢字の例を挙げよう。

	天	地	人	
該当する発音	Ten	chi	jin(nin)	声
その他の発音	Ame	tsuchi	hito(**)	読み

(*) 〈読み〉という言葉は、それを意味する漢字が少し変形するだけで「(本を)読む」という動詞にもなるし、その漢字の代わりに用いられる同じ意味の日本語にもなる。

(**) 〈人〉という上代大和言葉の単語が持つ本来の意味は「人間」であり、「光を担う人、明るく照らす人」と解釈されている。Hiは「太陽、光、炎」から、Toriは「手に入れる、つかむ、取る」から派生している。この解釈は、古い創世神話より生じたものである。その神話によると、この世で日本だけが、イザナギとイザナミという最初の神夫婦に創造された国であり、〈帝〉および日本人の先祖にあたる太陽神が生まれた国なのだという。それに対して諸外国は、神々の影響によって、泥の塊ならびに海の泡から生まれたのである。神の直接的な創造力から誕生したのではない。それゆえに古い国家観に従って、日本と日本人は諸外国や他の民族より優れているのだという。

1-4. 表音文字：〈仮名(kana)〉

〈声〉と〈読み〉の相関関係を理解しておくことによって、後半で日本語のテキストを読む際に、様々な解釈が可能になるのではないだろうか。

日本語と漢字を用いて文字を書くときに、言葉を音節ごとに日本語で表現できるように、よく用いられる漢字数百字が、表音文字の〈仮名〉(*)として選出された。

(*)〈仮名〉とは、kari ないし karu, すなわち「借りる、借用する」の意味であり、〈名〉とは「名前」の意味である。実際の名前〈真名〉(ma は、真実の、そのとおりの)とは異なり、特に意味をもたない表音文字の借用語⁽⁸⁾である。〈仮名〉という言葉は、漢字で書くと、借りた名前を意味する〈仮名〉である。〈仮名〉という言葉には、〈仮名文字〉という意味があり、仮名で書かれたものは〈仮名書き〉である。

1-5. 筆記体

表音文字は、中国語で先に完成したことから、中国語の古典形式ないし筆記体で書かれている。筆記体は、漢字を構成している一画一画が中断することなく一筆に連結されることで(*), 本来の文字の略図が描かれている。

(*)中国人同様に、日本人は文字を書くときにはペンではなく〈筆〉を利用する。そしてインクの代わりに〈墨〉を利用する。〈墨〉は使用のたびに、粘板岩を削って研磨された石の〈硯〉で摺られる。日本人も中国人も、右から左へと文字を書き、縦書きの場合には上から下へと書く。そのために日本の用紙〈紙〉は、たいてい薄紅色の約2センチ幅の縦線で区切られていて、西洋紙に横線が引いてあるように、日本では書き文字がまっすぐになるよう縦線によって導かれる。ただ日本人は文字を線の上ではなく、線の間に書くという違いがあるが。最近では漢字と片仮名が右から左へと横書きされることもある。

1 - 6. 伝統的な書体：〈正字(Seiji)〉

極めて達筆な伝統的書体のことを、正しい文字という意味で〈正字(Seiji)〉ないし〈真字(Shinji)〉(*)という。または活字書体として〈行書(Giyau shio, 発音は Giyo shio)〉ともいう。(**)この行書を用いて、日本の史書である〈大和文(Yamato bumi)〉あるいは〈日本御代記(Nihon miyo ki)〉(***)が中国語で執筆された。この作品は、西暦前661年から西暦後696年(皇紀元年から皇紀1356年)にかけての日本最古の歴史を題材としている。第四十四代〈帝〉の〈元正天皇〉(西暦715-723年, 皇紀1375-1383年)の命を受けて、皇子の〈舎人親王〉が編纂、西暦720年(皇紀1380年)に三十卷本として上梓された。

(*) 〈正字〉と〈真字〉の sei と shin は、本当の、正しい、真正の。どちらも中国の古い言葉である。ji は漢字で単語を表わす。

(**) 〈行書〉の giyau は、教会法ないし規律を意味し、shiyu(中国語)、kaki(日本語)は、書くという意味である。この両者に、同じ漢字が用いられる。

(***) 〈大和文〉とは日本に関する本。〈日本御代記〉は日本について書かれた年代記。Yamato と Nihon(Nippon)は日本のこと。fumi は何かを対象に書かれた書や本。ki は歴史や年代記のこと。⁽⁹⁾

1 - 7. 〈大和仮名(Yamato Kana)〉と〈万葉仮名(Man yo Kana)〉

筆記体といえば、一万枚の葉の束を意味する〈万葉集〉(*)が挙げられる。八世紀中盤に編纂された古い古典詩集のことであり、ここから古典的な仮名形式のことを〈大和仮名〉、筆記体のことを〈万葉仮名〉と呼んでいる。

この二種の仮名形式を略記する必要性から、新たな文字形式が誕生した。それは漢字とは区別して、〈日本国の文字(Nihon goku no monji)〉(**)と名付けられた。古典的な仮名形式か、あるいは筆記体の仮名に由来するものかによって二種に分かれて、〈片仮名(Kata kana)〉と〈平仮名(Hira gana)〉と呼ばれるようになった。

(*) 〈万葉集〉とは，中国語を起源とする文字の集合体。Man とは一万の意味であり，yo ないし ya は日本語で ha すなわち葉のことで，shiu は日本語で寄せる yoseru すなわち集めるの意。

(**) 〈日本国の文字〉の Nihon とは日本のことで，koku は帝国のこと，no は属格を表し，monji とは文字のことである。

1 - 8. 〈片仮名 (Kata Kana)〉

〈片仮名書き〉(*)は，古典仮名の略記である。本来は脇に小さな文字で書かれて，音である〈声〉や意味にあたる〈読み〉を伝えていた。それゆえに〈片仮名文字〉は，添え字ないし半字とも呼ばれていた。

〈片仮名〉は，第四十五代〈帝〉の〈聖武天皇〉(西暦724-748年，皇紀1384-1408年)の治世に，留学生として十九年間唐に留学した学識豊かな〈右大臣〉(右側の大臣)(**)の〈下道真備 (Shimotsu Michi no Makibi)〉によって考案された。五十の韻の表である〈五十韻 (Go ju in)〉(***)も同様に彼の考案である。下道真備は西暦757年(皇紀1417年)に没した。

(*) 〈片仮名書き〉の kata とは単なる合成語で，一組の片割れ，一方を指す。
(**) 〈右大臣〉の dai は大きな，u は右側にいる，jin は大臣という意味。他の中国語由来の官職同様に合成語である。右大臣は比較的古い時代からすでに存在していたが，やがて国務長官にあたる〈太政官〉の四階級のひとつとなった。西暦786年(皇紀1446年)，第五十代〈帝〉の〈桓武天皇〉(西暦782-805年，皇紀1442-1465年)によって制定され，都に配属されたことで，国家が地方長官に統治されるようになった。Dai は大きい，jiyau (jo) は皇子の居城や宮殿，k⁽¹⁰⁾'wan は官職や役人を指している。

(***) 〈五十韻〉の go とは数字の五のこと，ju は十のことで，goju は漢数字の五十を表わしている。in は(古い中国語で)韻のこと。

1 - 9. 〈平仮名 (Hira gana)〉

〈平仮名〉は中国語の筆記体の略記であり，いわゆる草文字の〈草字 (Sauji, Souji)〉(*)の略記でもある。平らな文字を意味する〈平仮名書き

(Hira gana gaki) (**) , あるいは Hiro gana gaki (***) とも呼ばれている。というのも、縦書きの文字幅の全スペースを占めてしまうからである。この筆記文字であらゆる公文書や書簡等が執筆され、多くの書物が印刷されていることから、一般的な書体といえる。西洋の書法と同様に、いくつかの文字をまとめて、関連づけさせることができるという利点もある。

1-10. 〈弘法大師(Kobo Dai ji)〉：音声システムの発明者

この平仮名を考案したのが、仏僧の〈弘法大師〉(****)である。九世紀初頭に、弘法大師は十二の母音と三十五の子音に分かれているブラーフミー文字、パーリ語、〈梵字〉(*****)にならって、日本語の母音と子音を四十七に制定した。それは、ほぼ同数の漢語と日本語の仮名文字で表現されている。

1-11. 足りない音を判別する記号：〈濁り(Nigori)〉と〈まる(Maru)〉

これに〈濁り〉や〈まる〉といった判別記号を付けることで、〈平仮名〉の数は七十二にまで増やされた。

1-12. 日本人のABC：〈いろは(Iroha)〉

こうして〈弘法大師〉は、日本人のアルファベットである〈いろは〉という音声システムを構築したのだ。最初の三つの文字音に従って命名された〈いろは〉は、次のように続いていく。

いろはにほへとちりぬるを
わかよたれそつねならむ(ん)
うるのおくやまけふこえて
あさきゆめみしゑひもせす

無言の最終文字 n は、上代大和言葉の方言で mu として表現されている。

(*) 〈草字〉は，sau(so)chinでもあり，kusa は日本語で草を意味する。両者ともに同じ漢字を用いる。ji は中国語で文字のこと。sauji(soji)は草文字または筆記体のことである。

(**) 〈平仮名書き〉の hira は平らなという意。同様。

(***) 〈平仮名書き〉の hiroi は，幅の広い，広い，拡大した，広々としたという意。

(****) 〈弘法大師〉(dai は偉人，shi は先生)は第四十九代〈帝〉の〈光仁天皇〉(西暦770-781年，皇紀1430-1441年)が統治していた西暦774年(皇紀1434年)に誕生し，第五十四代〈帝〉の〈仁明天皇〉(西暦834-850年，皇紀1494-1510年)が統治していた西暦835年(皇紀1495年)に没した高僧である。西暦804年(皇紀1464年)から三年間遣唐留学し，サンスクリット語とパーリ語，中国語で，ブラーフミー文字を学んだ。帰国後は，真の言葉を意味する〈真言(Shin Gon)〉という仏教団を設立(shin は真実の意，gon は言葉の意)，音韻システムを構築した。

(*****) 〈梵字〉の Bon は合成語で，仏僧の秘密に関連する全てを意味する。ji は文字の意。よって〈梵字〉とは，仏教徒が今日使用している文字のことである。パーリ文字の〈梵語〉はパーリ語の意で，仏教徒が今日使用している言語のことである。go は言葉，言語の意。

2. 〈いろは〉

2-1. 〈片仮名(Kata Kana)〉文字

〈片仮名〉文字とそれを意味する略記の漢字。漢字はときに頭文字としても用いられる。

伊	呂	半	仁	保	反	土	千
イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	チ

利	奴	流	乎	和	加	興	多
リ	ヌ	ル	ヲ	ワ	カ	ヨ	タ

礼	曾	州	子	奈	良	牟	宇
レ	ソ	ツ	ネ	ナ	ラ	ム	ウ

井	乃	於	久	也	末	介	不
イ	ノ	オ	ク	ヤ	マ	ケ	フ

己	江	天	阿	薩	幾	弓	女
コ	エ	テ	ア	サ	キ	ユ	メ

三	之	惠	比	毛	世	須	
ミ	シ	エ	ヒ	モ	セ	ス	

2-2. 〈平仮名(Hira gana)〉文字

〈平仮名〉文字は学校で教えられる。これに対応する漢字の略記より誕生した。

以	呂	波	仁	保	反	止	知
い	ろ	は	に	ほ	へ	と	ち

利	奴	留	遠	和	加	興	太
り	ぬ	る	を	わ	か	よ	た

礼	曾	門	禰	奈	良	武	宇
れ	そ	つ	ね	な	ら	む	う

為	乃	於 ⁽¹¹⁾	久	也	末	計	不
ゐ	の	お	く	や	ま	け	ふ

己	江	天	安	左	幾	由	女
こ	え	て	あ	さ	き	ゆ	め

美	之	恵	比	毛	世	寸
み	し	え	ひ	も	せ	す

2-3. 書き方，繰り返し符号，句読法

〈いろは〉には ti と tu と si の音が欠けているが，代わりに chi(発音は tsi), tsu, shi という音で表現される。母音で終わる音節はすべてが短く発音され，音節の終わりの u はほとんど発音されることがない。フランス語で言えば，無音の e のようである。例えば，砂 Suna の発音は s'na, 草 Kusa の発音は k'sa, 官 Kuwan の発音は k'wan といった具合になる。〈濁り〉によって，k の音はすべて g の音になる。sa, se, so, su が za, ze, zo, zu になり，shi, chi が ji になり，tsu が dzu に，ta, te, to が da, de, do に，そして h の音すべてと fu の音は，b の音に変化する。これは合成するときに，開音節と繋がる子音が起こす現象なのである。〈○(Maru)〉は，h の音すべてと fu を，p の音に変化させる。

このように変化させられた音は〈濁れる声(Nigoreru kohe)〉(*)というが，これは純粹でない混濁した音を意味している。

〈片仮名〉と同様に〈平仮名〉もまた，縦書きの際には上から下へ，横書きの際には右から左へと書かれている。近年においては，〈片仮名〉と漢字が横書きで書かれるようになった。というのも，〈片仮名〉が左から右に書かれるからである。漢字は右から左でも，左から右でもいい。漢字が〈片仮名〉と一緒に横書きされる場合は，両者ともに左から右へと書かれる。

〈片仮名〉文字を繰り返すときは，「、」の記号，二～三音節の言葉を繰り返すときは，「〜」の記号，語末の母音を伸ばすときには，「ー」という記号で表現される。乳飲み子である yaya を表現するとしたら「ヤ、」⁽¹²⁾となり，度々の意味として tabi tabi と繰り返したいときには「タヒ〜」という表現になる。

句点である「,」の記号, 読点である「。」ないし「.」の記号の用法は, 書き手の気分委ねられている。多くの人々は読点を新しい文章の冒頭に配置するが, 他に小さな丸「。」、大きな丸「○」、または正三角形「△」を用いることもある。句点「,」は音節の繰り返し文字「、」と極めて類似しているが, 文字の右前に置かれる。一方で繰り返し文字は, 同じ文字の下に垂直に置かれる。例えば「ク」を繰り返すときは, 「ク、(kuku)(13)」という表現になるだろう。

(*)〈濁り〉とは, 純粹でない, 濁ったという意味であり, 〈○(Maru)〉は円, 球形を表わしている。瑞穂草第二巻。

2-4. 二重音

長音節は, 様々な表音文字を組み合わせられて作られる二重音節によって表現されている。例えば ho という音節が, hou や hofu, hoho になったり, jo という音節が deu や desu 等になったりするように, その意味や相応の漢字によって作られる。二重子音は, 閉音節の u で終わる相応の音節と結びついて作られる。例えば, 驚いたことを意味する bitsukuri, 六百を意味する rokupiaku(roku hiaku), 最初の町を意味する ichi cho は, bikkuri, roppaku, icho⁽¹⁴⁾と発音されるのである。

3. 表音法と正綴法

ここから, 二つの異なった字訳方法が誕生した。古い方法が表音法, 新しい方法が正綴法である。前者の方法が一般的で, 音の強弱はつけても抑揚はつけず, 特殊な音域の変化やアクセントをつけずに, ただ長音節だけを発音する方法である。この方法には不都合もある。西洋人の場合は母国の発音や書き方によって, または個人の解釈によって, 1つの日本語の単語を違う意味の単語として再現してしまうことがあるからだ。同じ言葉を

字訳する際に意味が交錯して、しばしば食い違いが生じるのである。

正綴法による字訳方法は、〈東京(江戸)〉の英国公使館の通訳を勤めていて、日本語と中国語に精通した〈サトウ(Satow)〉氏により近年導入された方法である。この方法は正確であるのはもちろんのこと、同時に国際的綴法としてその利点が認められている。長音節、二重母音、二重子音を、それらを構成する音声記号で表現することができるのだ。同時に音の響きも表現し、その輪郭を描き出すことによって、同音の音節や単語を判別して解釈するための大きな手助けとなってくれる。この方法に異論があるとすれば、これまであまり慣れていないということ、発音に多少の困難が生じることであろうか。だが後者は重要ではない。長音ないし二重母音を表わす音声記号の組合せの可能性は百十八しかなく、そのうち八つが三文字で、残りすべてが二文字で表現できるからである。ここに濁りの子音で始まる二十二の変化が加わることで、正綴法による合成語は合計百四十になる。明らかに少数派で、しかもほぼ中国起源の言葉なのである。

日本語ないし〈大和〉言葉は、表音法と正綴法に従って、一定の方法で書かれている。次の例が、これを説明してくれるだろう。例えば、表音法で書かれた語 ko は、正綴法の様々な書き方によって、意味が変化する。指小辞の ko であれば、子供、何らかの物質の細かい粉、蚕、木、孤児など。古めかしく kofu と書けば、願う、求める。kou と書けば、夜の時間区分、子供からの服従、香。また kau と書けば、五日間の期間、貴族の称号、称賛に値する行為や徳、⁽¹⁵⁾コウノトリの一種。三文字で書かれる長音の例としては、sho がいいだろう。これには様々な正綴表記と意味があるが、⁽¹⁶⁾商人を意味する〈商(shiyau)〉と、証明や証拠を意味する〈証(shiyou)〉を挙げておこう。正綴法で書かれた二重子音の例は、これまでいくつか言及してきた。同じ文字で書かれていても、様々な意味に解釈できる単語を正確に見極めるには、それらの漢字が持つ決定的な意味の違いを考慮しなければならないのだ。ここまで言及したことに引き続いて、次は同じ言葉なのに様々な異なった翻訳、特に仏教表現と思考法における内容の多様性と

二重の意味解釈を明らかにしていきたい。これまでより詳細な論評に入っていこう。

正綴法の次は、読者の皆様に考えながら復習して頂けるように、発音の音声表記を添えて、本書に登場する日本語の単語を、初めて音声システムで書いてみることにする。

〈弘法大師〉は、記憶しやすい四行の教訓詩に〈いろは〉を分けた。これは日本語訳された仏教の聖典であり、最重要書のひとつ〈経(Kiyo)〉(*), すなわち仏教の基本原則「この世の全ての正しいこと」であると言われている。表音表記と正綴表記をつけた〈経〉の原典を言葉通りに訳出したうえで、その比較対象として、語を区切って分けられた〈いろは〉を挙げてみることにしよう。仏教の教えに出てくる漢字の読み解釈を、〈いろは〉が具体的に説明してくれるだろう。

(*) 〈経〉は聖なる書であり、仏教徒のバイブルである。これらは古い仏教に用いられた中国語で書かれている。その言葉と文字は、世俗文学に用いられることはない。

3 - 1. 仏教の聖典〈経〉の一節、〈いろは〉の文字配列で再現される「全存在の価値否定」について

経(キヨ)の原文	
訓 読 み	音 読 み
1) Shiyo giyau mu shiyau	Sho giyo mu jo
2) Ze shiyau metsubau	Ze sho meppo
3) Shiyau metsusu metsusu ji	Sho metsu metsu ji
4) Jijaku metsusu ii raku	Jaku metsu i raku

意味(読み翻訳)
1) この世の存在の全ては、無常である
2) 死は、生の後に続いて来るものだから
3) 生は終わり、死もまた過去の物になる
4) 無だけが、真の幸福を与えてくれる(*)

(*) 〈経〉の原典分析。ここで気づくことは、同音の言葉が様々な漢字で書かれることによって、様々な解釈ができるということである。

1) Shiyō giyau (Shō giyō) というのは、行為、行動のことであり、shiyō (shō, 合成語でのみ使用) は、ある行為の行われる場所、地点のこと。kiyau (kiyō, ki は濁りによって、gi に変化) は、仏教徒の戒律や寺院規則のこと。よって shō giyō は、私たちの行為が行われている場所や時間、すなわち存在を表現していると言っているだろう。mu は否定の接頭辞。shiyau (jō, shi は濁りによって ji に変化) は、真の、真実を意味する。

2) Ze (zō と yō という強調の音節が結合することで作られている) は、そのものはいったいという意味。shiyau (shō) ないし sei は人生。metsubau (meppo) は、破壊や滅亡のこと。

3) Shiyau (shō) は人生。metsusu (metsu) は、死ぬ、終わる、滅ぼす。shi (濁りによって ji) は、死。

4) Jijaku metsusu (jaku met(s)) は死。jiyaku (jaku) は死ぬことで、これはある仏僧の死にだけ関連させて用いられている。metsusu は死ぬこと。ii (i) は、良い、気分よい、正しいこと。raku は健康の意で、苦痛や苦勞、不安からの解放を意味する。(Goku raku は、仏教徒の天国の呼び名である。goku は通常ではないことで、何らかの属性が最高に高められることを意味する。⁽¹⁷⁾)

〈弘法大師〉は上の〈経〉の原文と同じ意味の韻文を〈いろは〉で作り、以下のように歌いあげている。

1) いろ わ(は) にほへ ど(と) ちり ぬる を
2) わが(わか) よ たれ ぞ(そ) つね ならん(ならむ)
3) うい(うゐ) の おく やま きよ(けふ) こえて
4) あさき ゆめみ し よひ も せず(せす)

ここからは意味解釈である。言葉通りの訳を()の中に添えておこう。

1) 色(愛)(*)は(いい匂いの)感覚にしてくれるが、それは一定ではなく(散り散りになって)、移ろいやすい
2) 私たちの人生で長続きするものはなんだろう(何が一般的なのだろう)
3) この日(今日)が有為の山の向こうの岸辺に行ってしまったら(山の最奥に沈んだら)
4) 儚い幻影(浅薄な夢)が残るだけで、記憶は残らない(酔いしれることはない)(**)

(*)「いろ」が意味するのは、愛と色。両者に同じ漢字が用いられる。気まぐれな日本女性が、自らの恋人にうんざりして別れようとするとき、その意思表示として紅葉したかえでの枝を恋人に贈ることで、女の愛が葉の色同様に変わってしまったことを告げる。日本のかえでの学名は *Acer Paimatum* と言うが、形態の変化に富む葉という理由から、*Acer polymorphum* Sieb とも呼ばれている。実際に秋になって葉が紅葉することから、赤い秋の葉を意味する〈紅葉〉も存在する。

(**) 〈いろは〉歌の分析。

1) Iro は色, 愛。wa(ha)は文章の主語を表す後置詞。nihohe は、良い香りである nihohi(nioi)が広がることを意味する動詞の原型。to(濁りによって, do)は、並びにという意味の接続詞で、以前の発言内容に注目を向けるときに使用されることもある。chiri は、散らすや飛び散ることを意味する動詞の不定形。nuru は、助動詞 ni(nu)の分詞形で、立ち去る、過ぎ去る。wo は、主語に関連付けられる後置詞。

2) Waga(waka)は自分自身、私たち自身。yo は世界、人生。tare は誰、誰もが。so(濁りによって, zo)は、ここ。tsune は、通常の、一般の。naranの代わりに naramu(nの代わりに、古い語尾 mu)は、であるを意味する助動詞 nari の絶

対的未来。

3) Ui no yama という表現の解釈について。yama は山の意味であるが，ui (ui) には長い説明が必要である。uwi(ui) は行為という概念であり，さらに正確に言えば，様々なことを行い，実行し，到達しようとする意図や努力という概念である。muwi(mui) という言葉がその逆を意味しているが，u の意味は，存在する，存在しながらであり，ラテン語の助動詞 ens に相当する。ari, aru は存在するで，wi(i) は，行うことを意味する不規則助動詞 shi, suru の代わりに用いられている。それゆえに ui というのは，何かしながら存在するという意味になる。なお動詞 aru は安定している動作を意味することもある。続いて，仏教的解釈は以下のとおりである。「人間はこの世で生きている間は，何かをしたり欲したり，留まることのない衝動や希求でいっぱいである。完全に満たされることがない幸福や荣誉や富を求め，消えることのない願望と憧れに駆り立てられている。ただ死をもって，嵐のように激しく動く心臓が最後の休息を見出す」。「**有為**」の山をこえて」が意味するのは，その格闘と闘争が死後には終焉するということ。「そのあとに」，続いて聖典が指摘しているように，「この世のあらゆる苦勞と不安のあとには，幻影すら残らない」。no は後置詞で，先行した名詞の属格を示している。oku は最も内側にある部分，最も後ろにある部分で，山を意味する yama とつながっている。これは〈経〉から借用して，借用語になった話し言葉である。kefu(表音表記 kiyo の正綴表記)は，本日の意味。koyete は，kohe(ru) という動詞の完了形で，何かを越えていくことの意味。たとえば，橋を越えて渡っていくなど。

4) Asaki ないし asai は，浅い，深くないという意味。yumemi は，夢を意味する yume からきていて，夢見ることの意味。shi は特に意味のない接続詞で，古い詩や古典様式の中にだけ，良い響きのために，あるいは作品の音節数の調整のために用いられている。「ただ」と一緒に訳されなければいけない。yehi は，酒に酔って，うっとりしての意味。mo は，そして，また，いつものようにという意味で，重ねるときに用いられる接続詞である。「など」のような意味もある。sezu(sesu) は否定であり，する，つくるを意味する動詞 shi の現在形。

訳者注

(1) 本書は目次に各章や各節の見出しがまとめられているが，本文中には見出

しはなく、数字もつけられていない。本書の一部を訳出するうえで、便宜上訳者がつけたものである。なお本書には、現在の認識とは異なった記載もしばしば確認されるので、その点は訳者注の中で随時補足していきたい。

- (2) 原文のローマ字表記に漢字を当てた場合、原則として〈 〉でくくる。以下同。
- (3) 『和漢三才図会』とは、明の『三才図会』を参考にしながら、江戸中期に編纂された105巻81冊に及ぶ図像入り百科事典のこと。筆者注には「173巻」と記してあるが、正確には、大和について書かれた「第73巻」が正しいだろう。
- (4) ユンカーが来日した明治五年に、初代天皇である神武天皇が即位した年を元年として計算する日本独自の年号が制定された。本稿では()のなかに両者を併記している。
- (5) 「語」は、収集するではなく、語るという意味。
- (6) 『千字門』は正確には『千字文』と書かれる。孔子の教えの手引書ではなく、習字の手本である。
- (7) 『古事記』や『日本書紀』に登場する阿直岐は、百済よりの使者と言われている。筆者注には Anaki という発音で紹介されているが、現代においては Achiki という発音で認識されている。
- (8) 本書には Kiya ming と発音が表記されているが、前後の文脈から、これは「仮名」と推測される。
- (9) 原文の Nihon miyo ki に漢字を当てた。ただし、同名の書は存在しない。皇代記の類いを指すか。
- (10) 太政官は律令制において司法・行政・立法を司る機関で、官職・役人のことではない。その長が太政大臣。
- (11) 「於」の漢字は、原文ではてへん。
- (12) 「ヤヤ」という片仮名字は、原文では「××」と書かれている。メと×を誤って書いたものと推測されるが、文例として前後の意味が通じなくなるため、ここは「ヤヤ」に訂正している。
- (13) 原文を直訳すると「ク、はkuであって、ク、はkukuである」と書かれている。前者の繰り返し記号は不要であろう。ここは文脈が理解できるように訳出した。
- (14) iccho の誤記か。
- (15) 「夜の時間区分」は更か。更は一夜を初、二、三、四、五と五区分する時間単位のこと。「子供からの服従」は孝。「五日間の期間」は講(報恩講など)か。浄土真宗各派によって日程は異なるが、平均すれば五日間程度。「貴族の称号」は公。「称賛に値する行為や徳」は功。「コウノトリの一種」は鴻。ただし、kau と kou の区別は厳密ではない。

- (16) 職人の shiyau と原文で紹介されているが，shiyau は職人ではなくて商人の「商」ではないかと推測される。発音の例が理解しやすいように，ここでは「商人」と訳出した。
- (17) 『涅槃経』にみえる四句の偈を紹介するが，一部誤認も含まれる。正しくは諸行無常(あらゆる事物は永遠ではない)，是生滅法(生あるものはいつかは滅んで死に至る)，生滅滅已(生死を超えて安らぎの境地に入る)，寂滅為樂(悟りの境地には真の安楽がある)。
- (18) イロハモミジの学名は，正しくは *Acer polymorphum* Thunb.